# 第１章　広島大学附属幼稚園の概要

## １．名　称

広島大学附属幼稚園

ようこそ「森の幼稚園」へ

## ２．沿　革

昭和 41 年　広島大学教育学部附属幼年教育研究施設の創設に伴い，その研究園として広島大学教育学部附属幼稚園（２年課程）を設置
旧山中高等女学校子・山中記念館を仮園舎として開園した

昭和 53 年　広島大学附属学校部の創設に伴い，広島大学附属幼稚園と改称

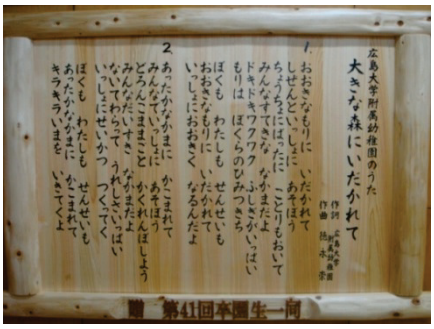
平成２年　東広島市に移転

平成５年　３歳児学級（３年課程）を新設

平成 16 年　国立大学の法人化に伴い，国立大学法人広島大学附属幼稚園となる

## ３．学級編成と定員

| | |
|---|---|
| ３歳（年少）ほし組 | 20 名 |
| ４歳（年中）うみ組 | 35 名 |
| ５歳（年長）そら組 | 35 名 |
| 計 | 90 名 |




園歌 「大きな森にいだかれて」

## ４．教員組織（平成 26 年度）

| | |
|---|---|
| 園　　長 | １名 |
| 副 園 長 | １名 |
| 教　　諭 | ３名 |
| 養 護 教 諭 | １名 |
| 非常勤講師 | ４名 |
| 事 務 職 員 | １名 |
| 森の達人（非常勤講師） | ３名 |
| ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ﾃｨｰﾁｬｰ | １名 |
| 学 校 医 | １名 |
| 学校歯科医 | １名 |
| 学校薬剤師 | １名 |
| 学校評議員 | ４名 |

## ５．目的と使命

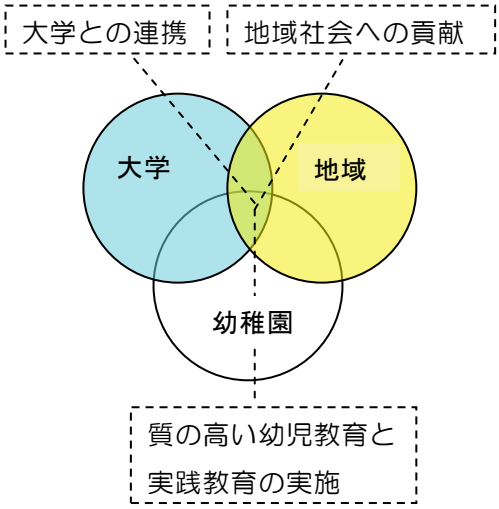
本園は，教育基本法および学校教育法等に基づき，幼児を保育し，その心身の調和的発達を助長することを目的とし，次の使命を有する。

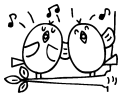
（１）広島大学の研究園としての性格を担い，幼児教育の研究に協力し，幼児教育の充実発展をはかる

（２）大学生あるいは大学院生の教育実習および養護実習の指導を担当する

（３）幼児教育の実践的研究をすすめ，その成果を公開する

（４）地域社会における子育て支援センターとしての役割を果たす



玄関横のピーチクぱーちく箱が，皆さんからの声を待っています

教育実習生と一緒に

## ６．教育理念

●大きな森にいだかれて　自然と一緒に遊ぼう

●あったか仲間にかこまれて
　　みんなで一緒に遊ぼう

お別れ遠足は異年齢ペアで鏡山登ぼり

## ７．教育目標

豊かな自然や友だちとかかわりながら
一人一人がその子らしさを発揮し
共に育ち合う生活を通して
心豊かにたくましく生きる力を育む

# 第２章　森の幼稚園って，こんなところ

## １．森の遊び場

森の幼稚園では，「森」の教育力を最大限に生かした保育を試みています。自然との体験を通して自分で考えて試行錯誤をしてみたり，『不思議だ』『怖い』などさまざまな感情を味わったりして，自らが楽しいと思える遊びをつくりだしていけるような遊び場を大切にしています。

# 第３章　森の幼稚園の教育課程と園児の生活

子どもたちは遊ぶ中で学んでいます。

だからこそ，遊びを大事に捉え，

子どもたちが自分で見つけた遊びを楽しむ時間をたっぷり保障しています。

これ, 何の花かなぁ??

自然物のケーキ

※「森の幼稚園の教育課程」は巻末に収録

## １．幼稚園の一日

### 【普段の生活の流れ】

8:50

おはよう!!
今日もいっぱい遊ぼう～

10:30

あ～ぶくたった，にえたった♥
みんなでやると楽しいね！

今日は何して遊んだの？
みんなに教えて☆

11:30

みんなで食べるとおいしいね

13:10

今日も一日楽しかったね

## 【「森の日」の生活の流れ】

登園

自由遊び

森の机でシールを貼ろう

集い

シートの上に座って，
歌ったりお話したりするよ

この枝をここにおいて･･･
森の中で作る作品は特別！

お弁当

砦で食べるの，気持ちいいね

自由遊び

帰りの集い

森の中での絵本の読み聞かせ。
小鳥のさえずりもきこえる～

## ２．一年間の行事

| | | | |
|---|---|---|---|
| 4月 | ●始めの日の集い<br>●入園式<br>●親子遠足 | 5月 | ●子どもの日の集い<br>●母の日の集い<br>●田植え |

6 月　●家族で遊ぶ日
●タマネギ収穫
●ジャガイモ収穫
●サツマイモ苗植え

7月　●七夕の集い
●カレーパーティー
●プール遊び
●川遊び

# 春

春はぽかぽかいい気持ち。
草花や虫がキラキラと輝く。
子どもたちも新しい生活に心ウキウキ。
あたたかい日差しの中で，いっぱい遊ぼう！

# 4月（3歳児）

【お花のにおい】

入園したばかりの子どもたちは，不安でいっぱい。そこで，タンポポがたくさん咲いている場所に散歩にでかけた。先生がタンポポを摘むと，それを真似して摘む子どもたち。何だかお花のいい匂いもしてきて，花の匂いをかいでみる。

【アメンボ？】

「アメンボがおるんよ」と，5歳児が捕まえたアメンボを見せてくれた。初めて意識して見たアメンボに「本当だ!!」とびっくりしていた。

【手が真っ黒】

砂場で遊んでいたら，気づいた時には手が真っ黒になっていた。そのことに驚いて，先生に「見て，手が真っ黒！」と叫んだ。

# 4月　（4歳児）

【 草花を使ったお料理 】

春の園庭に出た子どもたちは，自分の好きな花や葉で料理を始めた。たくさんの花で飾られたケーキや，いい香りのする色水ジュースができた。

【 怖いけど楽しい
そりすべり 】

きゅう坂の一番上から滑ると，ドキドキしてちょっぴり怖い。でも一度滑ると面白くて何度もやりたくなる。途中で止まらずに下まで滑り降りることができた時には，「やったー！」と満面の笑みに。

【 焚き火でのパン焼き 】

年中組になって初めての「森の日」に，森の達人がパン生地を持ってきた。木や葉っぱを集めて火をおこし，竹に生地を巻きつけて焼く。火の熱さや目にしみる煙を我慢してじっと待つと，パンが焼けるいい匂いが鼻をくすぐる。子どもたちは「おいしい」「あったかい」とできたてのパンを嬉しそうにほおばった。

# 4月（5歳児）

【 砦からはじめての
ターザンブランコ 】

年長組になり，意欲が増してきた子どもたちがまず取り組んだのが，砦からのターザンブランコ。誰も強制はしないが，自分から挑戦する子どもたちが多数いた。いざ跳び乗ろうとすると，怖くなって一歩を踏み出せない子どももいたが，そんな挑戦する姿を，周りの子どもたちも温かく見守っていた。

【 草花入りの
ホットケーキ 】

食べることのできる花や葉っぱの話を森の達人に聞いた後，園庭や森に探しに出かけた。スミレ，カラスノエンドウ，ヨモギ，ボケ，サルトリイバラなど，様々な食材を探してきた。その後，火を熾して鉄板をしき，ホットケーキの上に取ってきた草花を載せて，自分のホットケーキを作った。

【 春の草花での遊び 】

森の達人に遊んだり食べたりすることのできる草花のことを教えてもらった子どもたち。アセビの花をおでこでプチッとやって音を鳴らし，ヒメオドリコソウの蜜を吸い，スイバをちぎってガリガリとかじって遊んだ。ナズナの実を下に引っ張って，茎を回すとかすかに音がする。

# 5月 （3歳児）

【 綿毛飛ばし 】

黄色いタンポポが咲いていた場所に，今度は白い綿毛ができていた。綿毛を見つけた子どもたちは「あ，これ，ふぅ～てしたら，飛んでいくんだよね」「知ってる，お母さんとやったことある！」と，綿毛に息を吹きかける。

【 水たまりって
きもちいい！】

裸足になることを提案すると，子どもたちはなぜか水たまりに入る。自然と「きゃ～」と歓声があがり，パシャパシャと水しぶきをあげたり，お尻まで浸かったりする。

【 色水作り 】

年長児が色水作りを教えてくれた。3歳児は教わるがままにやってみる。花を擦りつぶすと，水が赤色や青色になってきた。

# 5月（4歳児）

【虫と仲良しになる】

ダンゴムシを見つけては，たくさん集める子どもたち。最初は手当たり次第探すが，毎日探していると石の下や畑の隅を探すとよく見つかることが分かり，友だち同士でどこにいるか教え合っていた。

【どろんこって気持ちいい】

田んぼに入るのは勇気がいるけれど，何度か入るうちに少しずつ慣れる。最初は足をつけて「ぬるぬる」「気持ち悪い」と言っていた子どもが，慣れると「気持ちいい」と笑顔を見せる。最後には泥の上に寝転がり，全身泥だらけ。

【すっぱいけど甘い，キイチゴ摘み】

みんなでキイチゴ摘みに出かけた。オレンジや赤といった色の違いや，大きさを見ながら，だんだんと色が濃く大きいものを選んで食べるようになる。

# 5月　（5歳児）

【 発掘遊び 】

山肌があらわになった場所で，発掘遊びが始まった。遊びの発端は斜面の穴。そこに何かありそうで，スコップを持ちだし掘り始めた。「化石が埋まっている」「虫がおった」など，子どもたちは足場が不安定な斜面で生き生きと掘り続ける。

【 ヘビを触る 】

春になり，暖かくなると様々な小動物も活動を始める。それらの中には，ケムシ，ムカデ，スズメバチなど，人間にとっては都合の悪いものもいる。ヘビもその一つ。しかし，もともとヘビが棲んでいたところに人間が勝手に侵入してきたのだから仕方がない。子どもたちが直接触る機会を作ると，「すべすべ」「冷たい」などの感想が聞かれた。

【 はしご作りでの協働 】

子どもたちが木登りする木に掛かっているはしごは手作りで，毎年作り替えている。今年も年長児がはしごにするためのアラカシの木を伐りに行った。頑丈な木なのでかなり重い。子どもたちは自然と協力し合い「オーエス，オーエス」と声を出し合っていた。

# 第４章　研究の取り組み

大学附属幼稚園の特徴的な使命の一つに研究の取り組みがあげられます。これは，全国の幼児教育関係者等の学びの場としての公開研究会と，紀要などの研究刊行物の発行に大別できます。

## １．公開研究会

外部の保育者や教育関係者に研究等を発信したり，共に学ぶための場として，「研究大会」「森の幼稚園フォーラム」「公開カンファレンス」という３種類の公開研究会を行っています。

本園職員による研究報告（研究大会）

**平成 24 年度の例**

| 項　目 | 概　略 | 内　容 | 回数・参加数 |
|---|---|---|---|
| 研究大会 | 本園メインの研究会。研究テーマについての報告を行い，著名な講師を迎え，講演を行う。 | ①公開保育<br>②分科会<br>③研究報告<br>④講演 | 年１回<br>約 150 名 |
| 森の幼稚園<br>フォーラム | 自然とのかかわりを大事にした実践をされている講師を迎え，それぞれの園の取り組みや自然とかかわる保育の意味を探る。 | ①公開保育<br>②研究発表<br>③講演<br>④フィールドワーク | 年４回<br>各回平均<br>40～90 名 |
| 公開<br>カンファレンス | 園内のケースカンファレンスを，近隣の保育者に公開して実施する。それにより，カンファレンスの意義や幼児理解を深める方法を発信し，地域の保育の質を高める取り組みを行う。 | ①ビデオによるエピソード視聴<br>②安心度・夢中度の評定<br>③カンファレンス | 年４回<br>各回平均<br>30～50 名 |

（1）研究大会

**講　演**

演題　「人として生きる根を
　　自然との共生の中で培う」

講師　　秋田　喜代美　先生
　　（東京大学大学院
　　教育学研究科教授）

秋田喜代美先生による講演

（2）森の幼稚園フォーラム

**第１回　森の幼稚園フォーラム**

講　演

演題　「幼少期における自然教育の重要性」

講師　　出原　大　先生（関西学院聖和幼稚園園長）

出原先生による講演とフィールドワーク

**第２回　森の幼稚園フォーラム**

講　演

演題　「自然に委ねる保育」

講師　　高田　憲治　先生
　　（広島女学院ゲーンス幼稚園
　　主事）

森に出てのフィールドワーク

# 第６章　　保護者と共に

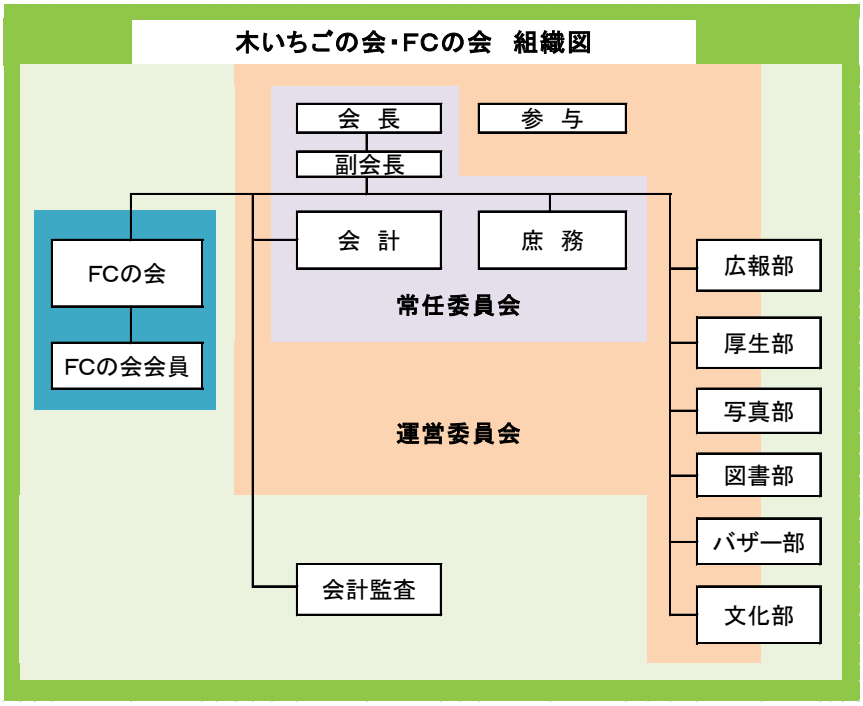
## １．保護者の組織

本園の保護者は，母親が家庭におり，育児に専念している家庭が大半です。核家族ではありながら，兄弟姉妹も 2～4 人と多い家庭が特徴的です。幼稚園への送り迎えなどに小さい子どもたちが同伴してくることはよくあることです。

このように核家族であり，若い世代での子育てが行われていることを考慮し，保護者に関わる活動に様々な工夫をしています。幼稚園と保護者が共に行う活動には大きく二つ，幼稚園主催の文化的行事（親講座ならびに親子体験講座）と保護者主催の文化的行事（ＰＴＣＣならびに文化行事部による親子体験講座）の内容があります。

木いちご(保護者)の会
‖
保護者全員の会

FC(フアーザーズ･クラブ)の会
‖
お父さんの会



## ２．幼稚園と保護者が共に行う活動

### 親子講座 ＆ 親子ネイチャーデー （平成 24 年度の例）

| 月 | 親　講　座 | 親　子　体　験　講　座 | |
|---|---|---|---|
| | | 対象：全クラス | 対象：そら組 |
| ４月 | 19 日（木）<br>25 日（水）子育て仲間へのご招待 | 26 日（木）親子遠足<br>広島市森林公園 | |
| ５月 | 12 日（木）園長講話<br>24 日（木）山登り<br>16 日（水）子育て仲間 | | |
| ６月 | ９日（土）園長講話<br>27 日（水）子育て仲間 | | 29 日（水）親子森の日 |
| ７月 | 11 日（水）子育て仲間 | | 天体観測会－月と土星－ |
| ９月 | 11 日（水）子育て仲間 | | |
| 10 月 | 16 日（水）子育て仲間 | | |
| 11 月 | 19 日（月）育て講座 | 太鼓の実演<br>太鼓本舗かぶら屋 | |
| 12 月 | 12 日（水）子育て仲間 | ８日（土）もちつき | 野鳥を見てみよう |
| １月 | 23 日（水）子育て仲間 | 楽しい歌のコンサート | |
| ２月 | 13 日（水）子育て仲間 | | １日（水）野鳥を見てみよう |
| ３月 | ６日（水）子育て仲間 | | |

## 森の達人コラム（その１）

### 森の幼稚園という場について　～森の達人（インタープリター）の視点から～

林　浩三（きのこの先生）

「森の幼稚園」で，子ども達は様々な器用さ（身体，コミュニケーション，感性）を身につけている。それを促す為に「森の達人」はインタープリター※1という役割を担っており，様々な手法でアクティビティを行っている。

しかし，子ども達と接するときの基本的スタンスとして，彼らの器用さや自然への気づきは，良い意味で無目的なシーンの一コマから発生し，自己成長するものであり，あらかじめ決められたことは創造的な「気づき」を阻害するという自覚がまず必要であろう。その思いから，筆者は「気づき」を促すような子ども達に対するちょっとした「そそのかし」を森の中で行うことを心がけている。

これは，決められた目的を共有し学習する一般的な教育とは正反対のプロセスとも言え，昨今，様々な形態の「森のようちえん」が増えつつあり注目される中，このようなオルタナティブな教育の視点を整理しておく必要があろう。このような教育環境を経験した子ども達が進学するに従い，増々その視点が重要性を増すものと考えている。

切り株に発生したエノキタケを見つけた子どもたち
森の仲間との共感や菌の不思議な営みを想像できるような感性が育ってくれたらと思う

※1　自然の事象について、様々な表現手段と感覚（五感）を用いながら解説し、参加者に自然への気づきを促す人

## 森の達人コラム（その２）

### クリスマスリースを作る

寺山　美穂子（ほねの先生）

森で集めた蔓と木の実などで，クリスマスリースを作ることになった。材料は自然物だけ。まず，子ども達の目を曳くのは，赤いガマズミや小さな紫色のトサムラサキ。どちらも,食べられる木の実として子ども達には馴染みのものだ。「ちっちゃい柿！」と，つまみ上げたのが，ピラカンサス。よく見ると，なるほど，色と言い形と言い富有柿そっくりだ。取りあえず,「食べないでね」とお願いして，リース作りが始まった。

木の実は，それぞれの思いを載せて，こだわりの位置に収まり，二つとないリースが出来上がる。大人の発想が及ばない作品群である。最後に，熱心に作業を続ける二人の女の子が残った。「ねえ，サンタを松ぼっくりで作りたいんだけど･･･」考えあぐねた様子で二つの松ぼっくりを差し出した。少しだけアドバイスするが，納得しない感じだ。そのうちに「決めた！」と満面の笑顔で見せてくれたサンタには，お髭に見立てたナンキンハゼの白い実がくっついていた。

先生が,「お弁当の時間だぞー。」と呼びに現れたが，二人はまだまだ製作に没入している。その姿を見た先生,「弁当より，そっちの方が大事だ！」と一言。さっさと出ていった。しばらく後，満足げな表情でリースを眺め，ふと我に返ったように「お腹空いた！」と駆け出す二人。

いくつもの素敵な場面に出会った,「森の日」の出来事である。

## 森の達人コラム（その３）

### ザトウムシ

菊間　馨（サルの先生）

「これ何？」と女の子が手に乗せてきた虫。体は小豆程もないが，細長い足を入れると全長５㎝位。「何ですか？これは」と松本先生が頓狂な声をあげる。「昆虫ですか？クモですか？」どちらでもない。ザトウムシはクモ綱ザトウムシ目の動物。そこらの林床に珍しくないが，害も益もないため認知度は低い。

昆虫の体は３つの部分に，クモは２つに分かれているがこの虫は１つ。松本先生は顔を近づけて見つめ「本当だ，そこから肢が全部出ている。でも６本ですよ，あ，左右同じ所が取れている。元は８本なんだ。変な奴がいるんだなあ。」

先生が大きな声を出しているので子どもたちが集まってくる。まして虫に見入っているのは大好きな松本先生だ。

大事なのは答えではなく，子どもの興味に心を合わせる大人なのだ，と改めて思った。

「見せて，見せて」「さわらせて」と集まってきた友達に，ザトウムシを見つけた女の子はちょっと小鼻を膨らませて「そっとさわってね，乱暴にすると足が取れるから」と，手の上の虫を差し出す。

ザトウムシは，おとなしく彼女の掌の上にいる。「この虫，〇〇ちゃんが好きなのかな」というと，彼女はこちらを見てニコッと笑った。

子ども達は，ザトウムシのことをすぐに忘れてしまうだろう。しかし，大好きな先生と楽しく遊んだ幼稚園時代は，記憶の底に残るに違いない。